豪州の酒類消費、2026年上半期に2％減 世界市場より大幅な落ち込み

IWSRによると、数量減を免れたのはRTDのみ。シードルは3％、ビールは2％減少した

2026年11月21日（土）



Drinks　Tradeが11月20日（金）に伝えたIWSRのデータによると、オーストラリアの酒類消費量は2026年上半期、前年同期比で2％減少し、世界市場全体を上回る落ち込みとなった。

比較対象は、世界の酒類消費量の合計76％を占める21市場。この21市場全体では、消費量が前年同期比で1％減少した。ただし、米国と中国を除くと、残る市場では1％の成長を記録しており、全体の結果にこの2大市場が大きく影響したことが浮き彫りになった。

オーストラリアの数値は、主要な酒類カテゴリー全体で需要が引き続き圧迫されていることを示している。消費者需要やカテゴリー間の競争の変化を見極める市場として同国を注視するビール醸造

会社、ワイン生産者、蒸留酒メーカー、輸出業者にとって、これは重要な動向だ。小売業者やサプライヤーが商品構成、価格設定、販促計画を見直す中で、特に注目される。

IWSRのカテゴリー別データによると、比較対象となった2024年、2025年、2026年の各上半期のうち、いずれの期間でもオーストラリアで消費量が減少しなかった主要カテゴリーは、RTD（すぐに飲める酒類）のみだった。2026年上半期はシードルが3%減と最も大きく落ち込み、ビールが2%減で続いた。

2026年上半期、オーストラリアではワインと蒸留酒がそれぞれ1%減少し、市場全体よりも底堅さを示した。ワイン業界にとって、これは消費者が市場の他の分野で支出や飲酒を抑え続ける中、ワインカテゴリーが酒類需要全体より持ちこたえたことを示唆している。

一方、IWSRによると、数量ベースで見たオーストラリアの動向は、世界全体の状況とは異なっていた。減少の大部分を占めたのは3つのカテゴリーだった。規模が大きいため、1%未満の減少でも全体への影響が大きかったフルストレングスビール、4%減のスティルワイン、そして11%減の国内スピリッツだ。

世界のデータからは、大市場と小規模市場の間に広がる隔たりがうかがえる。米国と中国はいずれも大幅な減少となり、酒類全体の数量はそれぞれ4%、3%減少した。IWSRによると、ブラジル、インド、コロンビア、南アフリカ、英国の成長が十分に大きく、米国と中国を除く市場全体の消費量をプラスに押し上げた。

「世界の酒類市場は一様だったことはありませんが、今回の最新データは、米国と中国の消費者と、それ以外の世界との間に隔たりが広がっていることを示しています」と、IWSRのプレジデント兼マネージングディレクター、マルテン・ロデワイクス氏は、Drinks Tradeが報じたコメントで述べた。「この2カ国は数量、金額の両面で業界最大の市場であるため、これは業界にとって課題となります」

全体的な減速が続く中でも、成長したカテゴリーはあった。IWSRによると、21市場全体では、ノンアルコールビール、インド産ウイスキー、プロセッコがいずれも2026年上半期に数量を伸ばした。この内訳は、消費者の動きが一方向ではない市場の姿を示している。飲酒量を減らす人もいれば、カテゴリーを切り替える人もおり、利便性や節度、特定の機会に合わせた商品へと移る人もいる。

ロデワイクス氏は、節度ある飲酒が市場の構造的な特徴になりつつあると述べる一方、複数の国では依然として力強い成長が見られると付け加えた。「スティルワインやフルストレングスビールといった大規模な伝統的カテゴリーが、酒類全体（TBA）の数量をマイナスに押し下げていますが、ほとんどの市場ではRTDとノンアルコールビールの成長がその影響をある程度相殺しています」と同氏は語った。

オーストラリアの生産者や輸入業者にとって、今回のデータは、単に全体が減少したという見出しから受ける印象より複雑な状況を示している。ビールとシードルは引き続き低迷し、RTDは底堅さを保った。スティルワインはより大きく落ち込んだものの、ワイン全体の減少幅は市場全体より小さかった。企業が需要の弱まる分野と比較的堅調な分野を見極める中、こうした違いは在庫、マーケティング、輸出の優先順位に関する判断を左右する可能性がある。